

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 高等学校学習指導要領では、外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにすることを目標としていることを踏まえて、4技能のうち「読むこと」「聞くこと」の中でこれらの知識が活用できるかを評価する。したがって、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しないこととする。
- 「リーディング」「リスニング」とともに、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、各CEFRレベルにふさわしいテキスト作成と設問設定を行うことで、A1からB1レベルに相当する問題を作成する。また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 「リーディング」については、様々なテキストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問うことをねらいとする。表記については、現在国際的に広く使用されているアメリカ英語に加えて、場面設定によってイギリス英語を使用することもある。
- 「リスニング」については、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問うことをねらいとする。音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。
読み上げ回数については、英語の試行調査の結果や資格・検定試験におけるリスニング試験の一般的な在り方を踏まえ、問題の数の充実を図ることによりテストの信頼性が更に向上することを目的として、1回読みを含める。十分な読み上げ時間を確保し、重要な情報は形を変えて複数回言及するなど、自然なコミュニケーションに近い英語の問題を含めて検討する。全ての問題を1回読みにする可能性についても今後検証しつつ、当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。
- グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で高等学校学習指導要領に示す4技能のバランスの良い育成が求められていることを踏まえ、「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする。ただし、各大学の入学者選抜において、具体的にどの技能にどの程度の比重を置くかについては、4技能を総合的に評価するよう努めるという「大学入学共通テスト実施方針」（平成29年7月）を踏まえた各大学の判断となる。

2 各問題の出題意図と解答結果

- ・ 第1問は、英語の特徴やきまりに関する知識・技能（特に文構造及び文法事項）に基づき、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い発話を聞いて、必要な情報や、発話内容の概要や要点を把握する力を問う。日常的な内容の文を聞いて、内容が合っている選択肢（セクションAでは文、セクションBではイラスト）を選ぶ問題である。

第1問の正答率はおおむね高かったが、問2のように、現在完了形や否定形を聞き取って時系列を判断する問題、問4のように、数と未来表現の出てくる文を聞き取る、時系列を捉え、全体として何が起きている（または起きる予定である）かを理解する必要のある問題では正答率が下がる傾向があった。このことから、受験者の中には個別の単語は聞き取れているものの、発話全体の意味を正確に理解するための実践的な文法力において弱点のある者もいることが示唆された。

- ・ 第2問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報とイラストを参考にしながら聞き取ることを通じて、必要な情報を把握する力を問う。日常的な短い対話を聞いて、設問に対する答えをイラストから選ぶ問題である。

第2問の正答率はおおむね高かった。文脈が与えられ、対話の中で必要な情報が分散して示されていること、また選択肢がイラストであることがその主な理由であると考えられる。しかしながら、その中で問9の正答率が著しく低かった。これは、this, that, hereなどの指示語の理解だけではなく、質問文Which item is the woman holding?に対して、イラストがアイテムと矢印で示されたごみ箱の絵であり間接的な意味理解作業を要求されたためと考えられる。一方で、問11の正答率は著しく高かった。イラストがシンプルなものであり、会話もシンプルで容易に連想できるものであったことから考えられる。

- ・ 第3問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報を参考にしながら聞き取ることを通じて、概要や要点を目的に応じて把握する力を問う。日常的な対話を聞いて、対話内容に関する設問の答えとなる選択肢を選ぶ問題である。対話は言語の機能（例：依頼、誘い、感謝等）を軸に作られており、小問6題のうち、今回は問15と問17をイギリス英語による発音とした。また、この大問から音声は1度しか流れない。

第3問全体の得点率は全体的には昨年度に比べて多少高くなったが、小問によって正答率が高いものと低いものが混在していた。問13は、状況推測が容易だったようで、正答率が高くなった。問15では、聞こえてくるLondonと、正答選択肢のthe UKを関連付けるという作業が必要であったからか、正答率は低くなった。問16は、runny noseなどの言い回しがなじみのないものであった受験者が多かったのか、正答率は低かった。

- ・ 第4問Aは、必要な情報を聞き取り、図表を完成させたり、分類や並べ替えをしたりすることを通じて、話し手の意図を把握する力を問う。最初の問題については、昨年度は話の順序に図を並べ替える問題であったが、本年度は、大学の授業を聞きながら、ワークシートのグラフを完成させる設問である。また問22～25は、昨年度と同様に表を完成させる問題であったが、その内容は、ゲームの国際大会の結果と賞品に関する話を聞いて、各チームが得た賞品を選んで完成させるものである。第4問Aは、第1問の文（2回読み）・第2問の対話（2回読み）・第3問の対話（1回読み）から、長めのモノローグに移行する設問としてのつなぎの役割を果たしている。

グラフを完成させる問18～21は、昨年度の図の並べ替えの設問に比べて正答率は低かった。グラフを理解し、聞き取った内容を使って完成させるという複合的作業のため、解答する時間も昨年より長めに設けたが、依然として難しいと感じる受験者が多かったと見られる。表を完成させる問22～25の問題は問18～21に比べて正答率は高くなった。

第4問Bは、複数の情報を聞き、最も条件に合う選択肢を1つ選ぶことを通じて、状況・条件に基づき比較して判断する力を問う。ここでは、交換留学先の高校で生徒会の会長選挙に投票するに当たって候補者四人の演説を聞き、考えている条件に最も合う候補者を決める。四人の話者のうち、一人はイギリス英語、一人は日本語母語話者による英語の発音とした。

- ・ 第5問は、身近な話題や知識のある社会的な話題に関する講義を聞き、メモを取ることを通じて概要や要点をとらえる力や、聞き取った情報と図表から読み取れる情報を組み合わせて判断する力を問う。ここでは、アジアゾウについての講義を聞く。講義を聞いて、内容理解・情報整理・論点把握をし、さらに講義内容と図表情報の統合をすることが求められている。

相対的な難易度がやや高い大問であるが、全体的な得点率は昨年度よりも高くなった。受験者がこの出題形式に慣れ、情報を組み合わせる作業への準備をより良くすることができていたと思われること、ワークシートが講義の内容に沿って整理されていたことなどがその原因として考え

られる。昨年度と同様、能力の識別力が高かった。

- ・ 第6問Aは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、話者の発話の要点を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理し、判断する力を問う。ここでは、ハイキングについて意見交換をする二人の会話を聞いて、会話の趣旨を判断する。

第6問Aの得点率は、昨年度よりやや低かった。特に問35は、母親の会話が終了した時点での意見を尋ねるものであり、最後まで音声をしっかり聞くことが求められた。

第6問Bは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、それぞれの話者の立場を判断し、意見を支持する図表を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理し、判断する力を問う。ここでは、就職後に街の中心部に住むか郊外に住むかについて議論する四人の意見交換を聞き、話者の立場を判断する。

第6問Bでは、四人の話者が登場するが、四人の話者を聞き分けることができるように、男女の声に加えアメリカ英語・イギリス英語・日本語母語話者による英語の発音による区別があり、昨年度と同様、会話の中でお互いの名前を呼び合うといった工夫がなされた。問36では、昨年度のようにある意見を持つ話者の「人数」を問うのではなく、ある意見を持つ話者の名前を選ぶという形式が導入された。その結果、正答率は昨年より低くなったが、設問としての識別力は高くなった。問37は正答率が高めであったが、設問としての識別力は昨年より高くなっており、成績上位の受験者層をそうではない受験者層と識別する役割をよく果たしたと言える。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

本テストについて、教育研究団体からは、「今年度も『知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する』という共通テストの問題作成方針がしっかりと反映されたものとなった」との評価を受けた。また、第4問以降で扱うトピックの選択の工夫についても肯定的な評価を受けた。

また、高等学校教科担当教員からは、「学習指導要領と整合している」との評価を得た。また、「多様な話者による英語が使用されている」ことも、高く評価された。高等学校教科担当教員からの要望と同じように、思考力・判断力・表現力等を必要とする、話者の意図、含意と文脈、内容理解を問うような問題、受験者が既存の知識や体験などと関連付けて理解できるような話題や身近な暮らしや社会での暮らしに関わる題材で、日常生活で用いられる自然な表現を示せるような問題の作成を続けていきたい。

一方で、出題に関して幾つかの指摘もあったが、以下に主な意見とそれに対する問題作成部会としての見解を述べる。

- ・ 第1問については、やや唐突に始まる印象があるとの指摘を受けた。本テストを通じて、なるべく難易度の低い小問から徐々に難易度が上がっていくよう工夫をしているが、今後も徐々に英語に耳を慣らしていける流れを作る方針を継続したい。
- ・ 第2問については、設定が思考に負担をかけるようなものが少なく、改善されたと評価を受けた。一方で、中にはイラストや場面設定、会話に更なる工夫をして欲しいとの意見を受けた設問もあり、今後も慎重に取り組みたい。
- ・ 第3問については、イギリス英語話者の会話が含まれることに受験者が慣れてきており、好ましいという評価を受けた。今後も引き続き改善に取り組むこととする。
- ・ 第4問については、設問に取り組む時間について改善が見られるが、引き続き考慮を続けてもら

いたいとの指摘を受けた。この点については、30分という限られた試験時間内に、いかに多くの設問を含めて信頼性を上げつつ、問題の状況設定や解答に求められている情報を明確に示すか、バランスを意識して引き続き問題作成に取り組みたい。

- ・第5問では、講義の内容が提示される順番とワークシートの順番が対応するよう整理されたことが取り組みやすくなったと評価された。トピックについても、前年度と比べて受験者になじみがあり、個人の背景知識の有無により理解内容に差が出ないようなものを選ぶ工夫がなされていたと評価を受けた。今後も引き続きトピックの選定には真摯に取り組みたい。一方で、聞かなくても解けるような箇所もあったという指摘もあり、これについては、きちんと全てを聞かないと解けない問題の作成を今後も目指すこととする。

全体に、解答時間の長さに関しては、本テストでは若干の改善が見られたと評価された。また、トピックについて、バーチャルイベントやゲームの国際大会など、多くの人を経験したことのあると思われるようなものが選ばれていることが評価されている一方で、学校生活や授業の一場面など、実生活に関連するようなトピックがもっと入っていてもよいのではないかという指摘があった。今後の問題作成の参考としたい。

4 ま と め

本テストの平均点は62.35点であり、前年度と比べて3点ほど高くなった。全体としてはやや易化との評価であった。共通テストの出題形式に受験者が慣れてきたこと、解答時間の調整が改善したこと、受験者が4技能の学習を強化した結果、リスニング力が全体的に向上したことなどの可能性が示唆される。

本テストは、4技能のバランスを意識し、場面設定などを日本語で表記することで、測る力を「聞く力」に集約している。また、様々なコミュニケーションの場面や状況を設定し、学習指導要領の方針を汲んだものとした。英語の多様化についても一定程度体現化できたと考える。こうした方向性については、今後も継続していきたい。

共通テストの高等学校の授業改善へ及ぼす影響が大きいことは、高等学校教科担当教員からの見解でも示された。生徒各自が、コミュニケーション・ツールとしての英語を体験できるような授業や指導の在り方を模索していくべきであるという見解は、問題作成部会も同じ思いである。

教育研究団体からは、テストが思考力・判断力・表現力等を問うことを目的としながらも、情報処理能力や処理速度だけを問うような問題設定となってしまうような問題作成を引き続き心掛けてほしいと要望を受けた。一方で、実際のコミュニケーションの場では、ある程度即時的に対応をすることが求められており、このような力もリスニングにおける基礎力を成すものと考えることが必要である。聞き取ったことを瞬時に理解・解釈できるようなリスニングの流暢性の力を高めるような学習にも引き続き力を入れてほしい。共通テストが引き続き、様々な場面で「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」につながる波及効果があるものとなるようにこれからも尽力していきたい。